

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会 の式典のありかたに関する人類学的試論

An Anthropological essay on the Ceremony of the Olympic
and Paralympic Games Tokyo 2020

岩瀬 裕子
IWASE Yuko

要旨

本稿は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会と略す）で開催される式典のありかた、とりわけ観客の参画の仕方について、オリンピック・パラリンピックにかかわる人びとの生活から検討することを目的としている。

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の公式発表によれば、オリンピックとパラリンピックにおいてそれぞれに行われる開・閉会式は一連の四部作として演出される。全体のコンセプトには、平和、共生、復興、未来、日本・東京、アスリート、参画、ワクワク感・ドキドキ感の8つが挙げられている。

本稿では、東京大会全体を貫く総合演出の流れを踏まえた上で、オリンピック・パラリンピックの言説で持ち出される「参画」と「多様性」をキーワードに、とりわけパラリンピックの式典のありかたから私たちの生活にまで思考を広げて議論する。

近年、さまざまな分野で、お互いの違いを認め合おうという共生社会や多様性という言葉が聞かれるようになった。しかし、例えば、オリンピックとパラリンピックへの参画を議論する場合、何をもって参画したかを論じるには長期的視座による検討が必要であろう。また、多様性という用語を使用する上で考慮すべきは、それが誰にとって多様なのかという視点を持つ必要がある。

本稿では、第1章で先行研究の整理をして本稿の位置づけを行う。第2章と第3章では、パラリンピックを中心にして過去の式典の枠組みと2020年の東京大会が置かれている前提を整理することで、式典全体の見取り図を示す。第4章では、参画と多様性に関わる文化人類学的議論を取りあげ、東京大会以降の私たちの生活のありかたを思考する。

キーワード：東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会 式典 障がい者 参画 多様性

はじめに

本稿は、2020年に迫った東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会と略す）の式典のありかたと観客の参画の仕方について、人びとの生活から検討することで、オリンピックとパラリンピックの言説でよく聞かれる多様性について検討する。とりわけ、社会で周縁化されることの多い障がい者等の視点を念頭に、参画と多様性に関する人類学的議論を整理することで、東京大会以降の私たちの暮らしのありように思いを巡らせる契機とする。

本稿では、健常者VS障がい者という、一方でなければ他方に類するという二元論の立場は取らない。私たちの置かれている社会では「健常者」に対して「障がい者」というカテゴリーを設けて論じることが多いが、その線引きはあいまいなものである。例えば、障害者手帳の交付基準が変わることで「障がい者」だった者が「障がい者」でなくなることはあり得る。日本には障害者手帳をベースにすると約32万人の視覚障がい者がいるとされているが、日本眼科医会が独自にアメリカの視覚障がい基準に基づいて調査した結果によれば、日本には見え方で困っている人が約164万人おり、そのうち約18.5万人が盲・失明に該当すると言われている¹。つまり、その線引きは国によってもまちまちであり、社会がシステムを稼働させるために引いているものに過ぎないのである。しかし、そうした便宜上、前提にしている枠組みや議論こそが「健常者」や「障がい者」を固定化させ、その違いを顕在化させる力として働いてしまっていることも事実である。加えて「障がい者」を一枚岩にして論じることが、個々の差異に目をつむることでもある。したがって、本稿では社会的カテゴリーがもつ危うさを自覚した上で、それぞれの人の単独的な様相を重視する地平から、2020年の式典への参画と、それ以降の人と人との結びかたを模索してみたい。

第1章 問題の所在ならびに研究の手法

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の公式発表によれば、オリンピックとパラリンピックにおいてそれぞれに行われる開・閉会式は、北京大会同様、一連の四部作として演出される。全体のコンセプトには、平和、共生、復興、未来、日本・東京、アスリート、参画、ワクワク感・ドキドキ感の8つが挙げられている²。

これまでのオリンピック・パラリンピックの式典研究は、専門家による学術研究の宿命からすれば当然のことであるが、それぞれの大会で目玉となる開会式のみを焦点化している。また演出に関して一定のテーマを設けた詳細な分析やオリンピックとパラリンピックを異質なものとして考察する流れにある³。2020年に向けてオリンピックの批判は展開できて⁴、時に障がい者にとって「生き甲斐」とされるスポーツにおいて、その最高峰の大会とされるパラリンピックを批判することは、学問的棲み分けという理由以上にどこかハードルが高いものとされているのではないだろうか。「多くの人……が『身体にハンデを抱える人の頑張る姿を通じて感動したい』という気持ちがある」⁵ことを障がい者自身も感じているところがある。

まずは、これまでの式典研究で整理されてきたことを振り返ることから始めよう。

第1節 先行研究

第1項 式典研究

国内においてオリンピックの式典研究をスポーツ文化の立場から牽引してきたのは舛本直文であろう。競技大会自体の批判や考察を試みる論考が多い中、舛本は「オリंपイズムの伝道師」と自称し、オリンピック教育のありかたや文化プログラムと関連性のある式典の考察に力点を置いてきた。スポーツ解釈学とマカルーンのスペクトル理論を下敷きに、ソウル・オリンピックを物語として記述することも試みている⁶。また社会学者の阿部潔⁷やパフォーマンス研究の高橋雄一郎⁸、情報学の森野聡子⁹らに見るように、「ナショナルなもの」や「〇〇らしさ」、国民国家を軸に式典を読み解く流れの一方で、カルチュラルスタディーズの渡会環¹⁰は、私たちの社会に見られる差異を「民族」や「宗教」という単位ではなく「個人」の属性として捉える「多様性」というパラダイムを焦点化している。ただ、多様性という概念については文化人類学において留保が必要な議論のため追って触れる。また、飯笹佐代子¹¹のように共生社会との関わりのなかで式典を論じる研究も生まれるなど、スポーツの国家イベントという枠組みをこえて、より社会的な視座で思考していく流れがある。

一方で、海外文献に目を転じてみると、都市プロジェクトの戦略や観光化に向けたマーケティングの視点からのオリンピック研究が散見されるなか¹²、2016年のリオ大会における考察においては「多様性」と「ナショナリズム」のはざまを描く論考¹³も生まれている。全体として2012年のロンドン大会を考察する論考が圧倒的に多く¹⁴、その中でパラリンピックの式典に言及したのはKeren Zaiontz¹⁵である。自身のボランティアパーフォーマーとしての経験からスタジアムのウチとストリートにおけるアートの可能性を論じている。また1980年のモスクワ大会から2012年のロンドン大会にかけての式典について記号論を援用してパフォーマンス分析したChris Arning¹⁶の研究や聖火のもつ儀礼性や象徴性等を考察したSynthia S.¹⁷の論文がある。しかし、いずれも、式典を専門的なある観点から考察するものに限られ、障がい者等の社会参画を視野に入れた私たちの生活とかかわる式典のありかたについて検討する研究は、管見の限り見当たらない。したがって、本稿ではオリンピックとパラリンピックのあいだの垣根や開会式と閉会式といった区分、スポーツか否かといった学術的枠組みに捉われることなく、東京大会の式典への参画の仕方を検討することで、大会以降の社会のありかたを広く議論できるようなきっかけを作りたい。世界を代表する超高齢化社会・東京が、同一都市として史上初めて2度目のパラリンピックを経験する場になるからである。

第2項 障害研究

生態人類学の戸田美佳子によれば、これまで「障害」に関しては、生物医学的な視点に立ち、例えば、盲、弱視、ろう、難聴やその他の身体的な損傷などの心身の機能障害（インペアメント impairment）といった「個人の属性」として見る見方と、個人が社会的活動のさまざまな場面で経験する不利益といった、社会と個人が衝突することで生じる不利や困難として現れる「社会現象（ディスアビリティ disability）」とみる見方の、二つの視点が展開されてきた。このように二つに区分されたのは「1970年代のイギリスやアメリカの公民権運動や自立生活運動を発端に、障害者運動を担う活動家が、主流の障害研究に対して異議申し立てたことに始まる」とされる。「現代の障害研究は、障害を個人的悲劇から社会の問題へと変えていった」ものの、今日の障害学は「障害者の社会的排除を

自明視しすぎたために、排除が発動されるメカニズム（ディスアビリティの発生過程）をとらえることができなくなっているのではないだろうか」と問題提起している。また、生物学的に治癒困難な損傷は「社会的コンテクストのなかで『障害（ディスアビリティ）』として現れたり現れなかったりするのではないだろうか」と「障害」が流動化する可能性にも言及している¹⁸。

「障害」の流動化は私たち一人一人の相手への接し方においても見られる。以下、2つのエピソードを見比べてみよう。筆者の親友の息子に知的障害のあるTがいる。私たちは彼の出生時から多くの時間とさまざまな思い出を共有してきた。Tが家に遊びに来て、たとえ、大声を発していても特段の心配をしなくなっている。せいぜい、夜だったら窓を閉める程度であろうか。ただ「いま・ここ」を一緒に過ごしているだけである。

一方、ある仕事で、シッティングバレーボール（パラバレー）選手Sの体験談を2度続けて聞いた日のことである。帰り際にSに御礼が言いたいと考え、彼女を追いかけた。筆者は「今日はありがとうございました。いろいろ考えさせられました」とSに頭を下げた。すると「ダメダメ！そういうのがダメ。暗い」と一喝された。彼女は「そういうのはいいから、普通にしてください」とつけ加えた。筆者は苦笑いし、その場を取り繕ったものの、そのあと一人棒立ちになり「何が“普通”で、何が“普通”ではないのか」と頭が真っ白になってしまったのである¹⁹。ただ、明らかに前者Tとの関わり方に比べると、筆者のSへの対応はかしこまっており、「障がい者」にする「一般的」な対応にとどまっている。つまり、決してお互いの顔が見える関係にはなり得ていなかったのである。

このように、筆者を含めた「障がい」を囲む人びとが、時に「健常者」と「障がい者」の境界を消したり、強めてしまったりすることはよくある。逆に「障がい者」自身が自分に「障がい者」のレッテルを貼ることもあるだろう。したがって、本稿では戸田の問題意識を共有する形で、「健常者」と「障がい者」の境界を固定化せず流動的なものとして位置づけ、検討を進めていきたい。

第2節 人類学的なものの見方とその研究手法

本稿の含意は、2020年に迫った東京大会に関する議論を一部の関係者や専門家にとどめることなく、広く各方面で呼び起こすことにある。文化人類学全般の学問的志向性、つまりは全体性への希求に表れるように、本稿では式典のみを取り上げて専門的かつ細分化して論じるのではなく、式典の演出に対して批評や提言のみを展開するのでもない。また、スポーツの大会だからといって、スポーツを専門とする視点を強調することもしない。そうすることが、オリンピックとパラリンピックを「健常者」や「障がい者」といった社会的カテゴリーから解放することに繋がり、スポーツの枠組みにとどまらない生活の視点から、式典への参画の仕方や大会以降の人と人とのありようについて広く思考することを可能にすると考えたからである。

本稿は、オリンピックやパラリンピックに関するこれまでの学術的議論や批判を「人類学的なものの見方」に引き付けることで、これまでの式典のありかたを乗り越える視点を模索する。「人類学的なものの見方」とは、専門分化したり何かに還元したりする視点ではなく、少しでも個々人の体験や実感を損なうことがないように、それぞれの生活における視点で全体的な把握に努める思考である。したがって、可能な限り専門を越え、かつ学術論文に限定することなく文献を参照したり当事者によって書かれた資料に当たったりした。前項で示したように、筆者自身の経験を時折、切り口とすること

で、本稿の問題意識をより具体的に示せるように心掛けた。加えて、あたり前とされている事柄を異なる視点から眺められるように、これまでの式典では成功とされている事例をもう一度立ち止まって批判的に検討した。次章では、これまでの式典がどのように扱われ、どのように行われてきたのかについて、先行研究で得られたデータと統合しながら、いくつかの切り口で整理していく。

第2章 これまでの大会の式典

——とりわけパラリンピックの式典を念頭において

本章では、オリンピックの変遷に触れつつも、パラリンピックの潮流や過去の大会における式典テーマの変遷、またはそれらをマスメディアがいかに報道してきたかに主眼を置いて整理していく。なぜなら、そうした見取り図を示すことで2020年のパラリンピックがどのような位置付けにあるのかを示せると考えたからである。まずは、パラリンピックが置かれてきた時代背景とその流れを振り返ろう。

第1節 パラリンピックの潮流

現在、パラリンピックは「オリンピック、サッカーFIFAワールドカップに次ぎ、世界第3の規模を誇る大会」²⁰に成長している。

身体障がい者スポーツの黎明期に大きく貢献した英国のストーク・マンデビル病院によるその歴史は先行研究に詳しいが²¹、本節では、パラリンピック史に影響を与えてきたオリンピックの影響も考慮に入れながら、1989年に誕生した国際パラリンピック委員会（以下、IPCと略す）を中心としたパラリンピックの歴史的変遷を概観していく。なぜなら、1974年版のオリンピック憲章第26条からアマチュアリズムとアマチュア競技者の語が消去²²されると、オリンピックは徐々にプロ選手の参加に道が開かれ商業主義が台頭していくが、パラリンピックもその影響を受けていくからである。

1980年から国際オリンピック委員会（以下、IOCと略す）会長を務めていたアントニオ・サマランチ²³は、破綻していたIOCの財政を建て直し、消滅しかけたオリンピックの存続を至上命題としていた。1984年のロサンゼルス大会では、ロサンゼルスの人口の83%がオリンピックへの財政支援に反対であり、そこで初めて、地方自治体や中央政府ではなく、民間企業の手によるオリンピックが開始された²⁴。新しい担い手の誕生である。一方で、かつては暗雲立ち込めていたテレビ放映権を中心とした新しいマーケティング戦略を作り、アマチュアリズムは貫かず、基盤となるビジネス組織の再構築に着手していった²⁵。そうした流れの中、1985年にIOCは、障がい者スポーツの国際調整委員会（以下、ICCと略す）²⁶がオリンピック年に開催する国際身体障がい者スポーツ大会を「パラリンピック」と名乗ることに同意し、少しずつ障がい者スポーツの組織体系に変容がもたらされていく。

他方、日本障がい者スポーツ協会によれば、ICCは国際障がい別団体の会長や代表などにより組織されており、実働組織として十分に機能していなかった。リハビリの延長ではなく競技性の高いスポーツ大会を望む多くの競技者やスポーツリーダーからの声が続出しており、1987年のオランダ・アーヘンでの会議で、すべての競技者や組織、国・地域を統一するために提案が始まっていったとされる²⁷。

この大きな潮目に、1989年に誕生したのがIPCである。つまり、IPCの歴史としてはここ30年のことになる。ただ、IPCの誕生前に行われた1988年のソウル大会²⁸とその次に開催された1992年のバル

セロナ大会は、ICCが主催していたことに変わりはないが²⁹、パラリンピックが競技性を志向する大会へと大きく変化したことは非常に大きな転換点といえる。なぜなら、日本障がい者スポーツ協会によると、バルセロナパラリンピック大会から標準記録の設定が厳しくなると予想される陸上競技と水泳について、競技団体と共催してバルセロナ大会の前年に当たる1991年度より「ジャパンパラ」の通称で知られる夏季競技大会が開催されていったからである。当時の日本の障がい者スポーツ大会には「全国身体障害者スポーツ大会」（現 全国障害者スポーツ大会）や各競技団体が自主運営する競技大会などがあったが、世界的なエリートスポーツ化の動向に対応したものではなかったためである。したがって、この「ジャパンパラ」がパラリンピックや世界選手権大会を目指すトップレベルの選手のための大会と位置付けられ、標準記録の設定や国際組織のクラス分けが導入された。また競技規則についても国際組織のものが適用されていったのである³⁰。

1994年のリレハンメルオリンピックにおけるサマランチのスピーチには、古代オリンピックの停戦協約を復活させようという意図が含まれており³¹、オリンピックブランドにおいては「平和」が強調されていく³²。

1992年のバルセロナ大会では、ドーピングコントロールに関する責任をIPCが担うことになる。1999年には世界アンチ・ドーピング機構（以下、WADAと略す）が設立され、IOCに代わってWADAがドーピング検査を始めることで、パラリンピックにも「クリーン」なイメージが付与されていく。そうした中、翌2000年に行われたシドニー大会期間中、サマランチIOC会長とステッドワードIPC会長によって、IOCとIPCとの協力関係に関する話し合いが持たれた。しかし、大会終了後、パラリンピックのバスケットボールで、知的障がいクラスのスペイン代表12人のうち10人が健常者であることが発覚し、金メダルを剥奪された。これにより、国際知的障害者スポーツ連盟（INAS）がIPCから資格を剥奪され、すべての知的障がい者がパラリンピックからいったん排除されることになったのである^{33, 34}。

こうした背景の中で、2001年には、IPCがIOCとの協力に関する合意書（「One Bid, One City」）が締結され、障がい者スポーツに関わる国際統括組織の独立が進められていく。この合意書には、例えば、オリンピック開催国は、オリンピックの開催後、パラリンピックを開催することやIOCがパラリンピック開催にともなう財政援助を行うこと、IPCはオリンピックとパラリンピックの両大会での後援が得られるスポンサーの獲得をめざし、その活動を支援すること、オリンピックの放映担当者は、パラリンピックの映像を制作する義務を負うこと等が申し合わされた。この合意により、2008年大会からは同一都市で同一施設を使ってオリンピックとパラリンピックを開催することが招致の条件になる等、パラリンピック大会やIPCの組織的なガバナンスの強化が求められていった³⁵。2012年には、IPCとIOCのあいだで前述した合意の延長がなされ、2020年の東京大会に向けた協力体制が続いている。

第2節 式典のテーマの推移

オリンピック・パラリンピックの協力体制の変容の中で、実際には、どのような主題で式典演出は行われてきたのであろうか。表1に、過去30年間に行われた8つの夏季オリンピック・パラリンピックにおける式典テーマと基本コンセプトを整理した。加えて、パラリンピックにも及ぶ影響を念頭に置くために、Arningが考察した夏季オリンピックの式典で見られるソフトパワー（文化や政治的価値

値観)を表2にまとめた。とりわけ2000年以前は具体的な政治状況との関わりが色濃く見られる。

例えば、1988年のソウル大会は、正式名称が「パラリンピック」となった大会であるだけでなく、

表1. 夏季オリンピック・パラリンピックの式典テーマや基本コンセプト (公式発表)

	オリンピック	パラリンピック
開会式	開会式	開会式
1988ソウル	「調和と進歩」ならびに美・力・平和を称賛とする韓国文化 (注1)	—
1992バルセロナ	地中海の承認力、豊饒さ、多様性、強固なインパクト、雄偉力	—
1996アトランタ	アトランタ、アメリカ南部ならびにその多様性；近代オリンピック100周年；若者の祝典 (注3)	—
2000シドニー	(注4)	—
2004アテネ	博愛 (humanity)、人類の発展、神話から論議への探求 (注5)	—
2008北京	(注6)	—
2012ロンドン	驚きの息々 (注9)	—
2016リオ	—	—
注1： 公式セレモニーに集った7つの作品は「偉大な1日」、「原子爆弾の神ガオズ」、「すべての隣を越えて」、「加藤」、「新芽」、「語り」、「1つの世界」と銘打って行われた		
注2： 公式セレモニーに集った7つの作品は「偉大な1日」、「原子爆弾の神ガオズ」、「すべての隣を越えて」、「加藤」、「新芽」、「語り」、「1つの世界」と銘打って行われた		
注3： アトランタ大会の主要テーマメッセージと結びついていて		
注4： シドニーという都市ではなく、オーストラリア全土の祝祭として位置付けた。先住民族と入植者との「民族の融和」など、矛盾を抱えたテーマの融合を目指した。		
注5： エリクサーの芸術と文学を参照している		
注6： 式典の芸術的な部分は「輝かしい文明」と「未来の時代」と名付けられた2つのパートから成っていた		
注7： 「One World, One Dream (1つの世界、1つの夢)」を要約するために加味された要素		
注8： ロンドンパラリンピックの公式ローガンは「Live as one (一つになるよう)」		
注9： 公式テーマは「A New World (新しい世界)」。リオオリンピックの公式サイトによれば「ブラジルの素晴らしい音楽の遺産に社会的メッセージと気候変動危機への警鐘を込めた」形で構成された。		
注10： 生命の多様性をテーマにしたシンフォニーを展脚		
一： 式典全体を象徴する明確なテーマの提示なし		

出典：各組織委員会オフィシャルレポートならびに映像資料より作成 (筆者訳)

表2. 夏季オリンピックの式典にみるソフトパワー

1980 モスクワ	アフガニスタン侵攻後のソ連 (USSR) への批判を和らげ西側諸国をなだめる
1984 ロサンゼルス	70年代の一時低迷後、アメリカ人を再び元気にして米国はまだ魅力的であることを示す
1988 ソウル	韓国の発展と南北統一の望みを強調する非同盟国
1992 バルセロナ	スペインの民主化を促進するだけでなくカタルーニャの自治を強調する
1996 アトランタ	より歓迎的でグローバル志向の米国を示し、南部州を誇示する
2000 シドニー	ミレニアム時代の到来、ざっくばらんで多文化なオーストラリアのためのパーティー
2004 アテネ	オリンピックを始めた威信と EU における「新しいギリシャ」のイメージを強化する
2008 北京	中世の王国が手にしていた栄光と権力を示し、調和を促進する
2012 ロンドン	魅力と創造的なレガシーに焦点を当て、英国は依然として素晴らしい社会だと思わせる

出典：Chris Arning, 2013, "Research Article — Soft power, ideology and symbolic manipulation in Summer Olympic Games opening ceremonies : a semiotic analysis", *Social Semiotics*, 23 (4) : 523-544 (筆者訳).

12年ぶりに、参加をボイコットしていたアメリカとソ連の二大国が揃った大会である。パラリンピックに先立って開催されたオリンピックの開会式では「調和」がテーマに掲げられ、世界の融和を目指す姿勢が窺える。続く1992年のバルセロナ大会でもその流れを受けて「ずっと友達 (Amigos para siempre)」を大会スローガンとして、多様性や想像力等が基本コンセプトになっている。1996年のアトランタ大会も同一の流れが続くものの、若者を取り込む動きが見てとれた。シドニーで行われた2000年のシドニー大会もアボリジニ出身のキャシー・フリーマンが聖火最終ランナーを務めるなど、アボリジニとの融和の上に現在のオーストラリアがあることを世界に向けて発信した。

経済規模が変わったのは2004年のアテネ大会である。ギリシャの財政難によりシドニーに比べ、かなり縮小した規模で開催された。加えて、アテネでは、オリンピック・パラリンピックの式典ともに人類や宇宙固有のエネルギーといった普遍的なテーマが焦点化され、自国の歴史や繁栄といった内向きの演出ではなかったことも注目になる。またアテネパラリンピックの開会式からは「生命力 (strength of life)、宇宙固有のエネルギー (energy inherent in the universe)」といった個別テーマが発表され、IPCより出される情報が増えていくことが表1でも確認できる。

2008年の北京大会では再びシドニーを上回る大規模な演出に戻り、国家の威信をかけて中国四千年の歴史が創り上げられた。2020年の東京大会は、オリンピック・パラリンピックの開・閉会式、つまりは4つの式典を1つのストーリーとして演出することが公式的に発表されたが、この北京大会も同様の手法で演出された。2012年のロンドンパラリンピックでは、自身でも聴覚障がいがあり、障がいのあるプロの俳優やスタッフによる英国の劇団「グレイアイ・シアター・カンパニー」で芸術監督を務めるジェニー・シーレイが開会式の共同ディレクターに招聘されたことでも話題にもなった³⁷。過去3つの夏季オリンピックの開会式では連続して映画監督が演出に起用されるなど、映像重視であることが窺える。

2016年のリオ大会では、パナソニックのAVCネットワーク社がプロジェクトマッピングと呼

ばれる技術を陰で支えた。これはプロジェクターを使って建物や物体に映像を映し出すもので、東京大会でもこうしたテクノロジーの力が強調されることは間違いない。それでは、こうした実際の式典を、国内のマスメディアはどのように報じてきたのであろうか。

第3節 マスメディア報道から

ロンドン、リオといった過去二大会の新聞報道では、コンパクトな式典、環境に配慮、テクノロジーとの関係性、身の丈にあった運営、多様性、クリーンな競技といった内容が散見される。

例えば、ロンドン・オリンピックの開会式では、IOCが開会式の時間短縮のために行進できる役員を減らした。ロンドンより一つ前の北京大会で行進した日本選手団は約240人だったのに対して、ロンドン大会ではその3分の1の選手44人を含む76人に限る³⁸など、コンパクトな式典への流れがある。また、開会式が行われた五輪公園では、イモリ類4000匹などを保護や移動させ、水生植物30万本を植えたり、式典の衣装類5万7000点にペットボトル4万本が再利用されたりと、自然と共生して環境に配慮した式典³⁹であることが注目されている。

また義足ランナーとしてオリンピックでは初めて陸上男子短距離のオスカー・ピストリウス（南アフリカ）がロンドン大会に出場⁴⁰したり、義足による男子走り幅跳びで、リオ・オリンピックの金メダル記録（8m38cm）を上回る障がい者アスリートの世界記録（8m40cm）を持つマルクス・レームが注目⁴¹されたりと、障がいをカバーする用具、つまりはテクノロジーの介入による競技のありかたに対して大きな議論が巻き起こっている。一方、リオ・パラリンピックに関する新聞報道を分析した遠藤華英⁴²によると、2020年への提言（24.8%）に続いてドーピングに関する報道（12.4%）が多かった。つまり、スポーツの要素であるルールのもとに保ってきた「公平」、「公正」が根本的に揺さぶられ、外在的なテクノロジーとオリンピック・パラリンピックとの関係性や大会を取り巻く自然とのありかたを検証する必要性が問われているのである。

国内経済が急速に悪化する中で行われたリオ大会は、オリンピックとパラリンピックの開・閉会式にかかる費用の合計が5590万ドルに削減される等、2008年北京大会の20分の1、2012年ロンドン大会の12分の1⁴³に規模が縮小されたことも報道された。加えて、「住民向けの運動施設を閉じておいて、巨額を投じてエリート向けの施設を作るのは納得できない」とする、選手村の建設で家を立ち退きさせられた人のインタビューを掲載して「国のためかどうかより、市民のためになる五輪かどうか厳しく問われる時代が来た」⁴⁴と評する紙面もあった。「物語の主役 国から人に」と見出しがつく流れは、はたして東京大会でも見られるのであろうか。リオで行われたパラリンピック開会式の前半部では、無数の人びとの個別な顔写真を画面いっぱい映し出して、その後、演出された一つの心臓がそうした多くの人びとの鼓動の重ね合わせだとする「多様性」のメッセージが発信されていた。近年、式典において表象されることの多い多様性についての議論は第4章で行うけれども、「身の丈」の大会をどのように教訓とするのか⁴⁵、東京大会では、国や都市の表象や富よりも「人」をいかに世界に発信するかが大きなカギと思われる。

第3章 オリンピック・パラリンピックの式典に関する前提

本章では、オリンピック・パラリンピックの開催都市がそれぞれの式典を開催するにあたり前提としているIOCのプロトコルをFactsheetなどをもとに整理する。一方で、開催都市である東京や開催国である日本が、2020年のオリンピック・パラリンピック開催時期に、例年、行っている主なスポーツ行事を整理し、時間的なローカル性を重ね合わせるとともに、東京という空間的なローカル性も視野に入れることで、東京大会が置かれた位置を確認する。

第1節 オリンピック憲章に基づく「約束事」

開催都市がオリンピックならびにパラリンピックの式典を計画して実行するには、『オリンピック憲章』の第55章-55がベースとなる。2017年版のIOC憲章によると、開・閉会式は「非公開の」IOCプロトコル・ガイドおよび開催都市契約に定められたその他のプロトコルの条件に従うものとされている。憲章には開催国の国家元首が読み上げる開会宣言の文言が提示されているだけでなく、IOC会長と開催都市の組織委員会会長のみが短い式辞を述べる権限を有していることも明記されている⁴⁶。一方、IPCも明文化された式典のプロトコルを持つものの、内容に関しては、ゲームズガイドと呼ばれる内規に記載があるのみのため、非公開とされている⁴⁷。

したがって、オリンピックとパラリンピックの式典については、開催都市が従わなければならない「約束事」が決められており、自由裁量の余地は限定的であるといえる。しかし、裏を返せば、開催都市がその「約束事」を遵守し、IOCやIPCからプログラムに関しての事前承認が取れさえすれば、その範囲内で芸術プログラムなど自由な演出が可能になるという訳である。2018年1月にIOCから発表されたFactsheet⁴⁸によれば、開会式の主要な要素は表3の通りである。表4にそれぞれ執り行った人物を整理したが、国王や大統領等の列席など国を挙げて大会に臨んでいる様子が明確に示されている。閉会式の構成⁴⁹は表5の通りであり、「約束事」の反復が確認できる。

2016年に行われたリオ・オリンピックの開会式では、初めて創設された「オリンピック栄誉賞」がケニア・オリンピック委員会のキプチョゲ・ケイノ会長（当時76歳）に贈られた^{50, 51}。加えて同大会

表3. オリンピックの開会式における主要なプログラム

1	観客入場
2	開催国の国歌演奏と国旗掲揚
3	選手団の入場行進
4	組織委員会会長とIOC会長スピーチ
5	オリンピック栄誉賞 (Olympic Laurel) 授与式
6	平和の鳩の象徴的放鳩
7	開催国代表による開会宣言 (表4)
8	オリンピック旗掲揚とオリンピック賛歌演奏
9	オリンピック宣誓 (選手、審判員、コーチ・関係者) (表4)
10	聖火の点火 (表4)
11	芸術プログラム

出典：IOC, Factsheet Opening ceremony of the games of the Olympiad (January 2018), pp. 1-4. (筆者訳).

表4. 夏季オリンピックの式典における各登壇者

夏季オリンピック開催都市(国)	開会宣言を行った国元首もしくは代表者名	宣誓を行ったアスリート名(競技)	宣誓を行った関係者(競技)	宣誓を行ったコーチ名(競技)	聖火の最終点火者名(競技)
1896アテネ(ギリシャ)	HM King George I				
1900パリ(フランス)	No official opening				
1904セントルイス(アメリカ)	Mr David Francis				
1908ロンドン(イギリス)	HM King Edward VII				
1912ストックホルム(スウェーデン)	HM King Gustav V				
1916ベルリン(ドイツ)→中止					
1920アントワープ(ベルギー)	HM King Albert I	Victor Boin(フェンシング)			
1924パリ(フランス)	President Gaston Doumergue	Georges André(陸上競技)			
1928アムステルダム(オランダ)	HRH Prince Hendrick of Mecklenburg-Schwerin	Henri Denis(サッカークー)			
1932ロサンゼルス(アメリカ)	Vice-President Charles Curtis	George Calnan(フェンシング)			
1936ベルリン(ドイツ)	Chancellor Adolf Hitler	Rudolf Ismayr(ウェイトリフティング)			Fritz Schilgen(陸上競技)
1940東京(日本)→東京→ベルリン(フィンランド)→中止					
1944ロンドン(イギリス)→中止					
1948ロンドン(イギリス)	HM King George VI	Donald Finlay(陸上競技)			John Mark(陸上競技)
1952ヘルシンキ(フィンランド)	President J.K. Paasikivi	Heikki Savolainen(体操)			Hannes Kolehmainen(陸上競技)
1956メルボルン(オーストラリア)ストックホルム(スウェーデン)→馬術	HRH the Duke of Edinburgh	John Landy(陸上競技)			Ron Clarke(陸上競技)
1960ローマ(イタリア)	President Giovanni Gronchi	Adolfo Consolini(陸上競技)			Giancarlo Paris(陸上競技)
1964東京(日本)	HM Emperor Hirohito	Takashi Ono(体操)			Yoshiro Sakai(学生)
1968メキシコシティ(メキシコ)	President Gustavo Diaz Ordaz	Pablo Lugo Garrido(陸上競技)			Norma Enriqueta Basilio de Sotelo(陸上競技)
1972ミュンヘン(西ドイツ)	President Gustav Heinemann	Heidi Schüller(陸上競技)			Gunter Zahn Athletics(ジュニア)
1976モントリオール(カナダ)	HM Queen Elizabeth II	Pierre Saint-Jean(ウェイトリフティング)			Sandra Henderson and Stéphane Préfontaine(陸上競技、ジュニア)
1980モスクワ(ソ連)	President Leonid Brezhnev	Nikolay Andrianov(体操)			Sergei Belov(バスケットボール)
1984ロサンゼルス(アメリカ)	President Ronald Reagan	Edwin Moses(陸上競技)	Sharon Weber(体操)		Rafer Johnson(陸上競技)
1988ソウル(韓国)	President Roh Tae Woo	Jae Hah(バスケットボール)・Mi Na Son(ハンドボール)	Lee Hak Rae(柔道)		Chung Sun-Man, Kim Won-Tak, Sohn Mi-Chung(陸上競技)
1992バルセロナ(スペイン)	HM King Juan Carlos	Luis Doreste Blanco(セーリング)	Eugenio Asensio(水泳)		Antonio Rebollo(アーチェリー)
1996アトランタ(アメリカ)	President Bill Clinton	Teresa Edwards(バスケットボール)	Hobie Billingsly(水泳)		Muhammad Ali(ボクシング)
2000シドニー(オーストラリア)	Sir William Deane	Rechelle Hawkes(ホッケー)	Peter Kerr(水泳)		Cathy Freeman(陸上競技)
2004アテネ(ギリシャ)	President Kostas Stefanopoulos	Zoi Dimoschaki(水泳)	Lazaros Voreadis(バスケットボール)		Nikolaos Kaklamanakis(セーリング)
2008北京(中国)香港(中国特別行政区)→馬術	President Jintao Hu	Yining Zhang(卓球)	Liping Huang(体操)		Ning Li(体操)
2012ロンドン(イギリス)	HM Queen Elizabeth II	Sarah Stevenson(テコンドー)	Mik Basi(ボクシング)		Callum Aitlie(セーリング), Jordan Duckitt(ロンドン2012ヤングアンバサダー), Desiré e Henry(陸上競技), Katie Kirk(陸上競技), Cameron MacRitchie(ボート), Aidan Reynolds(陸上競技), Acelle Tracey(陸上競技)
2016リオ・デ・ジャネイロ(ブラジル)	Interim President of Brazil Michel Temer	Robert Scheidt(セーリング)	Martinho Nobre(陸上競技)		Vanderlei Cordeiro de Lima(陸上競技)
2020東京(日本)					
2024パリ(フランス)					
2028ロサンゼルス(アメリカ)					

出典：IOC, 2018 Factsheet Opening ceremony of the games of the Olympiad, pp. 4-7. (筆者訳)

表5. オリンピックの閉会式を構成する要素

1	観客入場
2	開催国の国歌演奏と国旗掲揚
3	参加国・地域の旗入場
4	選手の入場行進（順不同）
5	メダル授与式
6	IOC 新アスリート委員の紹介とボランティアへの花束贈呈
7	記憶のとき (Moment of remembrance)
8	ギリシャの国歌演奏と国旗掲揚
9	オリンピック旗降納とオリンピック賛歌演奏、フラッグハンドオーバーセレモニー
10	次回開催都市による芸術ショー（8分間）
11	組織委員会会長スピーチと IOC 会長スピーチならびに閉会宣言
12	聖火の消火

出典：IOC, Factsheet The Closing ceremony of the Olympic games (December 2017), pp. 1-2. (筆者訳).

には史上初の「難民選手団」10人がオリンピック旗〔五輪旗〕のもとに行進した⁵²。関係機関の政治的思惑はさておき、こうした「難民」という新たなカテゴリーを創設し、国にも地域にも属さない／属せない人びとを救済する動きは、一国の利害にとらわれないトランスナショナルな可能性をもたらす試みといえるのではないだろうか。森野によれば、参加チームが「ネーション」名の入ったプラカードと国旗を掲げてスタジアムに入ってくる演出は1908年の第4回ロンドン大会からである。1928年の第9回アムステルダム大会からは、オリンピック発祥の地ギリシャがパレードの先頭を歩き、開催国が最後尾を務めるという慣例ができあがった。ただ、第4回ロンドン大会以前の1904年のセントルイス大会に出場したドイツ・チームにはスイスやオーストラリア出身の選手が含まれるなど、チームと「ネーション」、つまりは「国家」や「国籍」は必ずしも一致していなかったとされる⁵³。台湾、香港、パレスチナなどは、いずれも国際的には独立国家と認められていない「ネーション」を母体として、現在も参加しており、オリンピックにおける「ネーション」の概念が国民国家を単位とする国際社会の政治的分節とは必ずしも一致していないことは興味深い。

式典演出で強調される国家の枠組みの一方で、参加の裾野を広げるために、2016年に初めて見られた「難民選手団」や独立国家とは認められていない「ネーション」が存在することは、矛盾まで飲み込み肥大化するオリンピックの魔力なのか、それともそこに関わる人びとが「参加」に託した良心の発露なのか。谷口源太郎は、以下のように、「良識あるIOC会長」とされたジャック・ロゲ会長の言葉を取り上げ、国家ファーストの浸透を憂えている。「私が自由に選択できるなら、国旗を掲げる表彰式より、五輪旗を掲げる方を選ぶ。ただ、残念ながら国旗掲揚をやめたら、発展途上国のスポーツに対する投資の多くが消える。それが現実だ」⁵⁴。つまり、オリンピックが置かれた環境は、経済的側面が良識を上回るまでに変容しているのである。

式典の演出を紐解くと、式典開催の前提にある「約束事」と現実の社会情勢等のはざままで揺れ動いてきた様相が窺える。1908年に始まった「ネーション」による演出の一方で、五大大陸をかたどったオリンピックマークをつなげて世界の融和を表すオリンピック旗の掲揚や平和希求の象徴的放鳩⁵⁵、選手宣誓⁵⁶が採用されたのは1920年のアントワープ大会である。また、聖火が初めてスタジアムに灯さ

れたのが1928年アムステルダム大会とされる。現在、採用されている開会式のプロトコルの大半は1980年代までに整備されたもので、かつては「前座」扱いだった、開催国による「芸術プログラム」の比率も大きくなっていったとされる。そのアトラクション長大化のはしりが1980年のモスクワ大会開会式であった⁵⁷。つまり、第2章第1節で触れたように、大会も、そして目玉となる式典においても、1970年代中盤以降からの商業主義への移行を契機として大きな変容があったことが確認できる。

第2節 スケジュールからみるさまざまなローカル性

2020年の東京大会は、オリンピックを2020年7月24日（金）から8月9日（日）まで、パラリンピックを8月25日（火）から9月6日（日）の日程で行うことが発表されている。両大会の式典を一連の四部作として位置付け東京大会としての全体メッセージを発信していく場合、これまで語られているようにオリンピックの開会式のみを鑑賞して、あとの式典は見ないとすると、東京大会としての全体メッセージは十分に伝わらなくなってしまう。そうしたこれまでの傾向をくつがえしていくためには、オリンピックとパラリンピックといった一連の競技大会をスポーツの枠のみに押し込めず、人びとの日常生活に埋め込む必要があるのである。この点については第5章で論じる。

まず、7月24日（金）の午後8時から開始が予定されているオリンピックの開会式は、小・中学校の夏休みが始まる時期とおおよそ重なる。公立の小・中学校における夏休みの期間は各市町村の教育委員会に決定権があるが、受験を控えた年代などを除けば、多くの子どもたちがどっぷりと東京大会に浸かれるチャンスかもしれない。ただ、現代における子どもたちの多忙さは知られるところであり、勉強以外にもさまざまな習い事やお稽古があるであろう。せっかくの東京大会を、テレビですら観戦できずに学童クラブや保育園等で過ごすであろう子ども達の環境面にも目を配る必要がある。

8月6日は、世界で初めてアメリカ合衆国により核兵器の「リトルボーイ」が広島で実戦使用された日である。長崎に原爆が投下された8月9日は午後9時から東京オリンピックの閉会式が行われる。2020年の暦によると日曜日に当たる。

2016年のリオ・オリンピック期間中、NHKの報道番組「ニュースウオッチ9」の内容分析を行った山本夏生によれば、終戦記念日である8月15日のトップニュースは原爆関連ではなくオリンピックであった⁵⁸。山本の指摘には、世界に核の脅威を伝え平和の尊さを発信していくべき日本の公共放送において、唯一無二の8月15日に、平和の祭典と言いながらもオリンピックがトップニュースを飾ったことへの違和感が表明されていた。2020年の東京大会において8月15日はオリンピック・パラリンピックの合間に位置する。

同様に、オリンピックとパラリンピックの合間に行われる予定なのが、インターハイの名前で知られる全国高等学校総合体育大会である。当初予定していた北関東4県（群馬、栃木、筑波、埼玉）での全30競技の開催が困難な状況になり、一部競技を除き全国各地に分散して開催しなければならない事態が生じている。しかし、分散開催に伴い、これまでの開催地からの負担金や補助金だけに頼るのではなく、主催する全国高等学校体育連盟としても経費を確保する必要性があることから「2020インターハイ特別基金」への協力を呼び掛けている。大会を開催する直前の2020年6月までに基金総額7億円を目標額として取り組んでおり、2019年9月末日現在、5262万9987円が寄せられている。1963年に第1回大会が開催されてから半世紀以上がたつインターハイは、毎年、全国47都道府県から6000校

以上、3万6千名余りの選手、監督・コーチが参加し、60万人以上の観客数を数える全国規模のスポーツイベントである⁵⁹。さらに、例年行われる夏のスポーツイベントといえば、2020年に102回目の開催になる予定の全国高等学校野球選手権大会、つまりは夏の甲子園と、同じく2020年に65回目となる予定の軟式野球の全国大会であろう。2020年の硬式大会は、東京オリンピック閉幕の翌日となる8月10日(月)に開幕する⁶⁰。東京大会の期間中には、こうしたローカルな大会が高校生以下のカテゴリーを含めて数多く存在する。オリンピックとパラリンピックに関わる世界の人びとと、ローカルな文脈でスポーツを続ける人びとをいかにつなぐことができるのであろうか。なぜなら、代表選手がローカルを経由して成長したというだけでなく、オリンピズムが目指すものの一つにある人間の相互理解には、人びとの直接的な出会いが不可欠であると考えられるからである。近年、そのありかたを巡り国内で議論が続いている日本の部活動に対しても、海外から来るより異なる価値観の人びととともに互いのスポーツ環境を考える場があっても良いのではないだろうか。また、オリンピックとパラリンピックが開催されるからこそ日本にやってくるといった人びととともに、スポーツで汗を流せる時間と空間があっても楽しいのではないか。そうすることが、「観客」を「観客」、「開催地の人びと」を「開催地の人びと」などといった役割に押し込めることなく、「いま・ここ」で、ともにある人びととのあいだでの身体的な交換(交感)を促進することにつながると考えるからである。相互のやりとりの中心にスポーツがあり続ける必要もないのである。なぜなら、例えば「スポーツ好きの人」といっても1人の人間のなかにはスポーツ以外の興味関心や側面もあり、私たちの相互行為の連鎖は多層的な側面から成されていくからである。

第3節 東京という場

東京大会の式典に関しては、以下8つの基本コンセプトとその考えに基づき開催される⁶¹。

【平和】和を尊ぶ考え方が、分断や対立を超えた世界につながることを示す。

【共生】多様な違いを認め合い、支え合い、活かし合うことで、新しい価値を生み出す共生社会を目指すことを示す。

【復興】自然災害を乗り越え、諦めることなく次代を創ろうとする姿を示し、世界の人々への勇気へとつなげる。

【未来】持続可能で、人間性豊かな、新しい時代のスタートラインとする。

【日本・東京】歴史の中で培われ、今も生きる日本・東京の美しい感性を大切にす。

【アスリート】スポーツの祭典として、主役のアスリートが安心して参加できる式典を目指す。

【参画】多くの人々が自分も式典に関わっていると感じられるような、みんなで作る式典を目指す。

【ワクワク感・ドキドキ感】熱気や興奮が感じられ、一生に一度の体験となるような機会とする。

前節で触れたとおり、国内における夏のスポーツイベントは東京という場だけに埋め込まれているのではない。むしろ、東京もローカルの一つに過ぎない。そのような日本の首都であり、ローカルの一つでもあるという二重性を抱える東京を開催都市として発信していくのに持ち出されるのが、「テクノロジーと共存する東京」の姿と、歴史を遡って構築される「江戸文化への回帰」といったもので

あろう⁶²。いずれも、東京を中心化する文脈を補強すると思われる。なぜなら、後述するように、テクノロジーは時空間の縮約を可能にするけれども、一方でフィーンバーグがいうように、労働、教育、および環境の悪化は、その根源がテクノロジーそのものにあるのではなく、むしろ、テクノロジーの発達を支配している反民主主義的な価値観のうち存する⁶³からである。つまり、どのような価値観のもとでテクノロジーを扱うかということが問われているのである。加えてフィーンバーグは、テクノロジーに対して、そもそも人間的であるとはいかなることか、といったことにかかわる取捨選択を含むようになる⁶⁴と主張する。したがって、国家発揚のために最先端のテクノロジーを全面に押し出すことや被災地復興をただの「コンセプト」にした形で実際に広がっている貧富の差をなおざりにしながら「日本のテクノロジー」をお披露目することは、オリンピズムの根本原則にある、生き方の「良い模範であることの教育的価値、社会的責任さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重」⁶⁵に、本当に値するものなのかどうなのか、私たち一人一人が注視し、選び取っていくものでなければならない。

また「文化」はさまざまな差異を一般化する方向に働く側面をもつ。歴史家のホブズボウムは19世紀後半から20世紀初頭にかけて世界のあらゆるところで目にされた文化復興の動きを「創られた伝統」と呼び、歴史的には比較的、新しいものであるにもかかわらず、そこに真正性を持たせ「伝統」を発明していく過程を取りあげた。⁶⁶人類学では「伝統」のかわりに「文化」を用い⁶⁷、「文化」とされるものは決して変わらないものではなく、常に時代やその時の状況などによって改変させられ、変容していくものである一方、固定化される流れがあることも指摘してきた⁶⁸。2020年大会の式典演出における東京ならびに日本の「文化」発信は、私たちのステレオタイプを強化する可能性をもつであろう。一方で、歴史的には、「文化」というものが実際的な融通性によって変容してきたことを考えると、いまに生きる私たちがいかに「文化」が隠してきた／隠しているものを知り、それと向き合うかといった批判的な取り組みも、私たちに託されているのではないだろうか。

第4章 人類学的議論に引き寄せて——事例分析

本章では、1992年のバルセロナにおけるオリンピック・パラリンピック（スペイン語圏）と2016年のリオにおけるオリンピック・パラリンピック（ポルトガル語圏）を事例として挙げる。該当大会に絞った理由は、先行研究では成功事例に位置づけられることに加え、世界のメインストリームである英語圏ではなく、経済的にも中心にはない周縁にある開催地であること、また、本稿で検討する「参加（参画）」と「多様性」を思考するのに望ましい事例であると考えたからである。

第1節 「ウチ」と「ソト」を越えた参画をどう捉えるか

—バルセロナ・オリンピック・パラリンピック—

「バルセロナ・モデル」と呼ばれる名称を生むまでに、オリンピックを用いた都市再生に成功した⁶⁹とされるバルセロナ大会は、オリンピックが1992年7月25日から8月9日までスペイン・カタルーニャ州の州都であるバルセロナで、パラリンピックは9月3日から14日までバルセロナとスペインの首都マドリードで開催された。ペインによれば、「バルセロナは開会式・閉会式の演出で金メダルを獲得した」。⁷⁰当時、IOC会長だったサマランチがバルセロナ出身であり、組織委員会や市長に意見したこ

とも役立った。アーチェリーのパラリンピアンであるアントニオ・レボジョ選手が魅せた、火のついた矢によるドラマチックな聖火台への点火や1万人の選手を覆いつくしながら徐々にその象徴的な姿を現したオリンピック旗など、劇的で、サマランチが注文をつけた視覚に訴えた演出方法が功を奏したと評される。スイスのローザンヌにあるオリンピックミュージアムで1995年に行われた第1回国際シンポジウムでは、すでに当時、テレビが式典の解釈に欠かすことのできない役割を担っていることが指摘されている⁷¹。こうしたテレビ視聴者をいかに惹きつけるかという演出は、多額の放送権料を支払っている放送局やスポンサー企業に向けたものとして、今日も変容し続けている。

しかし、近年、そうした「テレビ向け」に視覚を重視して演出することで、スタジアムのスタンドで観ている人には「演出の説明が随時入るわけでもなく」伝わりにくいところがあるのではないかという声が演出側から上がってきている。さらにスタジアムの座席位置によってはどうしても見えない範囲ができてしまうという⁷²。つまり、限られた人のみが高いお金を払って入場できる式典において、チケットのない「ソト」の人の方が式典を堪能できる可能性が広がってきたともいえる。帰りの混雑も存在しないだろう。もちろん、スタジアムの「ウチ」で生観戦できるその空気感はブラウン管を通した「ソト」とは共有し難いものがあるであろう。「ウチ」の体験はスポーツ観戦の醍醐味でもあるからである。しかし、どこが「ウチ」でどこが「ソト」か、その境界が不明瞭になればなるほど、式典は開かれたものとなる。たとえ、「ソト」にいてもテレビをほかの人たちと共有することで、そこには二次的な祝祭空間が生まれる。「ソト」にいながらにして自分たちが楽しめる「ウチ」の空間を創り込めるのである。つまりは「式典に入れた恵まれた人」と「そうではない人」とされている枠組みも、その関わり方次第で実に流動的なものになるのである。そこには、「一見、恵まれていないとされる条件にあっても」いかにして「私たちのもの」として楽しく変えていけるかといった「参画」と「遊び」の視点が重要になってくる。そうした意味において、バルセロナ大会の式典はユニークだといえるかもしれない。オリンピックの開会式におけるオープニングで、グラウンド上にできた「HOLA (やあ!)」の人文字とともに、会場にいる「ウチ」の人たちによる「HOLA (オーラ)、HOLA (オーラ)」の大合唱と万歳の連続は、単純でシンプルな演出ながら視覚と聴覚に訴え、大会の始まりにふさわしく「ソト」の私たちをも引き込む演出であったといえる。

バルセロナ・パラリンピックの陸上競技で4つの金メダルを手にしたハビ・コンデ選手は当時を振り返り、次のように語った。「町全体が祭りのようだった。選手もボランティアも観客も、楽しみたいという思いを持った一つの家族だった」⁷³。前章第3節で触れたように、2020年の東京大会では、この「参画」と、みんなが楽しめるための「ワクワク感・ドキドキ感」がキーワードになっている。「ウチ」と「ソト」の結合や反転、そして「ウチ」と「ソト」といった枠組みを壊す仕掛けが見られるのであろうか。

続いて、「参画」の観点から検討したいのが、基本コンセプトの一つに挙げられている「参画」が、いったい、どのような意味を示すのか、ということである。観戦すれば「参画」なのか。観戦しなければ「参画」しないことになるのか。東京大会がオリンピックやパラリンピックの価値観を体現して、世界の平和を推進していくためのものであるとするならば、むしろ「参画」しない人、それが叶わない人の存在の方が重要に思われるのは筆者だけであろうか。パラリンピックに全ての障がい者が出場できるわけではないように、広く「障がい者」の「参画」と捉えれば、パラリンピックの枠組みに入

れない人びとをいかにして巻き込んでいくかも大切な視点である。東京大会の前後あわせた期間中だけを「参画」として捉えると、ボイコフが「祝賀資本主義」⁷⁴と呼び批判したように、人びとの浮足立った祝賀ムードを突いて進める資本主義の権化と化す東京大会の姿は否定できなくなってしまうであろう。筆者は、「参画」という側面を東京大会だけに限定するのではなく、東京大会が触媒となってもたらされるその後の私たちの生活や将来を含めた、東京大会の生産物として「参画」の影響を位置付けたいと考えている。なぜなら、長期間に及ぶ泊まり込みのフィールドワークを基盤としている文化人類学では、短期的かつある部分だけを取り出したり、数字等の一点に還元したりして考察するスタンスは取らないからである。たとえ、時間的に短くても、それぞれの生活に足場を置く構えは崩さないよう努めるからである。

日本の障がい者運動は1950年代に芽生え、70年代に大きく花開いた。荒井⁷⁵によれば、この時期の運動において重要なことは、日本では脳性麻痺者が中心となり、特に重度者が牽引する形で運動が進められた点と、障がい者たちによる運動が機関紙や同人誌といった紙媒体を中心的な舞台にし、個人的な感情を綴ることによって展開したという、二点である。また、荒川⁷⁶は、欧米のセルフケアグループがユダヤ・キリスト教の「告白」の文化に起源をもち、語り合うことを通じて発展してきた「語る・まじわり」であったのに対し、日本のそれは伝統的な「身辺雑記」の文化に起源をもち、綴ることを通じて発展してきた「綴る・まじわり」であったという岡の主張を取りあげている。こうした日本における障がい者運動の歴史も考慮に入れるならば、東京大会を契機に生成される「綴る・まじわり」もオリンピック・パラリンピックがもたらす二次的な大会への「参画」といえるのではないだろうか。これらの「まじわり」は綴り合う関係性の中で、時間的には遅れてやってくることもあり得るであろう。現在では、インターネットの普及によって、より時空間の制約なくコミュニケーションが可能になっているが、障がい当事者の視点による「綴る・まじわり」という「参画」が、東京大会のいかなる側面を触媒としてなされ、それぞれの生に対する語りを発露として生きた社会参画に接合されていくか、長期的視野に立って学際的に調査することが求められよう。

第2節 多様性という罫—リオ・オリンピック・パラリンピック—

近年、さまざまな分野で互いの違いを認め合おうという共生や多様性という言葉が聞かれるようになった。ロンドン大会では、23人の選手が性的少数者（以下、LGBTと略す）であると「カミングアウト」したが、続くリオ大会ではその倍以上にも上る50人以上のLGBTが出場したと報じられた⁷⁷。英国女子ホッケーチームの同性婚者が揃ってリオ大会に出場するのは五輪史上初めてというニュースも目にした⁷⁸。さらにオリンピックの開会式でブラジルのプラカードを掲げていたのは、ブラジル出身でトランスジェンダーのスーパーモデルであるリア・Tさんであった。聖火リレーでゲイカップルがキスをしたシーンやラグビー7人制女子ブラジル代表のイサドーラ・セルロ選手や、男子競歩イギリス代表のトム・ボスワース選手の、同性パートナーとの公開プロポーズも話題になった⁷⁹。こうして2016年8月5日から21日まで行われたリオのオリンピックと9月7日から18日まで開催されたパラリンピックの式典においては「多様性」の側面が強調されたことから、その報道においても「多様性」の文字があふれていた。

しかし、ここで多様性という語を用いる上で注意したいのは、それが誰にとっての多様性なのかと

いう視点である。小田⁸⁰は、現代日本で景観が悪化しているという言説の代表的なものとして挙げられる三浦展の『脱ファスト風土化宣言』を例に、以下のように説明している。三浦は、クルマ中心社会と郊外のショッピングセンターにより、歴史的な景観をもってきた地方都市の市街地が空洞化し、郊外の道路わきには同じような全国展開のチェーン店やショッピングセンターなどが並ぶといったどこも同じような景色になってしまったことを、ファーストフードとかけて「ファスト風土化」と呼んで批判している。つまり、近代以前から続く生活文化、つまりは食べ物や住まい等まで、均質化すべきではない、文化には多様性が必要だと三浦はいうのである。しかし、小田によれば、それは都市から地方を訪れたひとが「地方に来たのだから都市では味わえない、地方特有のものが食べたい」と願うように「都市のまなざし」に過ぎない。さらに小田は、地方の風土において固有の食文化を守っている地域の人々は、その多様性を味わうことはできないという。逆に、都市にあるショッピングセンターが地方に進出したことで、それまで都会に出ないと買えなかった世界各地で作られた多様な食品を、地方の人でも買うことができるようになったであろうと指摘する。そして、こうした議論において問題なのは、「都市のまなざし」であることに無自覚なまま、多様性はいいことだといっていることだと主張する。

つまり、本稿の文脈に戻して、「都市」の住人を「健常者」、「地方都市」の住人を「障がい者」と置き換えて考えてみるといいだろう。「都市」(健常者)では味わえないものを味わうために「地方都市」(障がい者)があるのではない。「健常者」のまなざしで「多様性」のある社会を思考する際に「障がい者」がいてくれることで役者が揃うというのは筋違いの話なのである。実際、「両手両足が使えない」お笑い芸人のホーキング青山⁸¹も「(私たち障がい者は)多様性のために生きているのではない」、「治せるものなら障害なんて絶対に治したいし、他の障害者も治すべきだ」、「障害者の存在意義は、社会の『多様性』のためだけなのか?」と述べている。青山自身「多様性」が大切だと真剣に思っていることを前置きした上で、何となくその言葉に重み、真実味を感じられないでいると、その胸の内を語っている。なぜなら、「社会のため」というのは障害者の存在の意義づけとしては聞こえはいいが、例えば、障害者に限らず、成果が上がらないという理由等で「社会のためにならない(であろう)」という人をことごとく排除してきた結果として、今日の社会は成立しているのではないかと、自身の問題意識も投げかけている。「多様性」を尊重するなら、まずは「障害者」という大雑把な括りを捨てること、障害者も健常者と同じ人間であること、そして何よりも目の前の個々の人々たちを知る努力をすることが必要だと青山は力説しているのである。

こうした議論の流れに立てば「LGBT」や「トランスジェンダーのモデル」といった属性によって多様性を主張した気になるのではなく「多様性」という語のもつ畏を自覚的した上で、それぞれをひとりひとりの人間として本気で理解しようと努めることこそが必要だと考える。

「新しいスポーツ小説」として注目を集めた浅生鳴の『伴走者』⁸²には、目の見えないスキー選手の晴がマスメディアの取材を受けるにあたりお化粧をしてきたことに対して、伴走者である涼平と、次のようにやりとりする場面が出てくる。

「晴、お前、化粧してるのかよ」(……)

「それって、どういう意味ですか。目の見えない人はオシャレをしちゃダメだっていうんで

すか」

晴は机に突っ伏したままクッと首だけを持ち上げた。

「そんなことは言っていない」

「せっかく写真撮られるんだったら綺麗にしたいじゃないですか。私、乙女なんですよ！」

「化粧したって晴には見えないだろ」

出会ったばかりの頃には、とても口にはできなかったことを、涼平も平気で言うようになっている。

「何言ってるんですか。自分じゃわからないからこそ、周りの人が不快な思いをしないように気を遣ってるんですよ」

寮で先生にしてもらったメイクをその後、周囲に褒められて晴は嬉しそうな顔になる。信頼関係を基盤とした伴走者の涼平と晴によるやりとりには、晴の乙女としての一面が覗かれる。私たちは、毎日の生活の中で、こうした<顔>のある人間関係(二者関係)をどれだけ構築できているのであろうか。

第5章 生活に埋め込まれた式典へ

本章では、前章で触れた「参画」や「多様性」に関わる人類学的視点で東京大会を提案するとどのようなありかたが考えられるのか、ひとつの試論として提示する。

第1節 世界を結ぶ生中継——長野大会の「同時性」という遺産

2020年の東京大会では、日本のテクノロジーがその演出の中心的な役割を果たすことは間違いない。しかし、注意しなければいけないのは、そのテクノロジーが「豊かとされる」⁸³国の単なる自己アピールと映らないことであろう。国際的に経済的格差がある中、東京の一人勝ちと映るような過度なテクノロジーアピールは避けるべきである。

日本のテレビはデジタル放送になったことで、誰でも字幕(CC:クローズドキャプション)を表示して見られるようになった。2015年時点で、NHK(総合)で84.8%、在京キー5局の平均で95.5%に字幕がついている。2014年、総務省が「スマートテレビ時代における字幕等の在り方に関する検討会」を立ち上げ、これまで字幕をつけることができなかったテレビのコマーシャルにも字幕をつけていくことと、2020年の東京大会の開催に向けて多言語字幕の実現について検討してきた⁸⁴。

国内外からユニバーサルデザインの施設として評価の高い羽田空港では「当事者参加型」のワークショップを繰り返すことで、非常時のモニターには4か国語で文字表示をしたり、トイレの個室にいるときに逃げ遅れることがないように天井に設置された火災報知器と連動したフラッシュライトが、ピカピカと光って危険を知らせてくれたりする。聴覚障がい者がエレベーターに閉じ込められてしまった際、通常の非常ボタンでは音声でのやりとりができなかったため、新たな「聴覚ボタン」を押すことで聴覚障がい者の存在を係員に知らせることができるようになった。そしてエレベーター内の液晶モニターに「係員が向かっています」という文字が表示され、係員が筆談の準備や手話ができるスタッフとともに駆けつけるという仕組みになっている⁸⁵。

このように日本では情報技術の革新に力を注いできたことから、2020年の東京大会でも、長野大会が創り出した「同時性」という遺産を生かして、例えば、世界を結ぶ生中継を用い、時間・気温・場所などさまざまに異なる空間をつなぐ、思考の上での水平化という試みをしたらどうだろうか。長野大会における「同時性」とは、長野（長野県県民文化会館と開会式の会場となった長野オリンピックスタジアム）と世界五大陸（北京、ベルリン、ケープポイント、ニューヨーク、シドニー）の合唱団による衛生同時中継によるベートーヴェンの交響曲第九番の合唱と演奏を指す。この「同時性」により、式典が、スタジアムという狭くて一部の人のために創られた「ウチ」の空間を越え、一定のお金を払って式典観戦ができる一部の裕福な人や運に恵まれた人のものから、より多くの人の手にわたることになった。式典の会場内にいる者だけが、オリンピック・パラリンピックのファミリーではない。それらを支える人びととのつながりがあるからこそ成り立つ大会であることを、思考の上でも発信できないであろうか。「(式典への)不参加も参加である」というメッセージの発信である。世界同時中継によって、同じ行為を世界でなすことは世界中がオリンピック・パラリンピックを応援しているという、「いま」の均質性を過剰演出してしまう危険性を孕む。しかし、式典への「不参加」という行為からなる異なる現状を映し出す同時性は、「いま」の複数性を発信でき、地続きで、さまざまないまを思考できる同時性になり得るのではないだろうか。例えば、オリンピックの式典の際に、続くパラリンピックでの活躍に向けて練習に励むパラアスリートのいまを伝えることもできるであろう。東京が進める「共生社会ホストタウン」との連携も生かせる。またオリンピック・パラリンピックの文脈とは全く異なる文脈における、いまを映像を通して発信することは「不参加」の背景を映し出す鏡になり得るのではないか。スタジアムを少し離れば、式典の盛り上がりとは別に、夜のスーパーで夕飯の買い物をしている者や残業でパソコンに向かってる者の姿もあるだろう。または、選手入場の際に選手の故郷である遠隔地と結ぶことで、大型モニターを介して子どもの雄姿を家族に届けることも可能になるであろう。逆に、わずか1人というその国の代表として東京で誇り高く歩く選手に向けて、故郷のパブリックビューイングのもとで自分のことを見守る母親の姿を届けることも可能であろう。式典映像の視聴を続けていると、およそ2時間にも及ぶ行進の中に、いったい、その国がどこにあるのか、どういった産業のもとに成り立つ国であるかも見当がつかない参加国や地域があるのが本音である。子ども達の晴れ舞台を目にできない家族や友達、いま、どこで、どのような思いで、時空間を共有しているのかと想像が掻き立てられる。そうした差異をも、まるごと映し出す場面が少しでも挿入されることで、行為の複数性が映し出すいまの厚みを世界に向けて届けられるのではないかと考えている。

ゴリラ研究の世界的権威である京都大学の山極総長⁸⁶は、イギリスの人類学者であるロビン・ダンバーは「人間の会話のほとんどはゴシップでできている」と喝破したというが、そのゴシップを共有することで世の中で起こっていることを知り、知識を共有するという。「道徳というものも、本来は文字に書かれた言葉ではなく、話し言葉で紡がれたストーリーで伝えられるべきもの」とも語る。この発言は、マスメディアの情報がゴシップでできているというのではない。「人と人がリアルに接して、生身の体を使って話をする、共同作業をする」、つまりは、たとえ放送を介しても、そこで出会った者同士がその場で聞いたストーリーから肌感覚で世界を理解していく有効性を指摘しているのである。

テレビ離れが叫ばれている中、ひとつの式典という場を現地において生で体感したり、それが叶わ

なくても多くの人と同じ場で映像を共有したりすることで、共同作業としての「ゴシップ」や身体に刻まれた記憶が広がる可能性はさらに高まっていくのではないだろうか。

第2節 裕福な者の「格好良さ」の発信とその「格好良さ」が隠すもの

すでに、さまざまな方法で東京大会のチケットは販売されている。高いお金を払った者だけが享受できる価値がなければ、式典に足を運ぶ人は増えないのかもしれない。会場における生の式典鑑賞は、スタジアムの「ウチ」だけで得られる現場性と、誰もが生で見られるものではないという式典参加への希少価値が最大の魅力となる。

しかし、筆者はあえて、裕福な者（やチケットを手にするという運に恵まれた者）の「格好良さ」のありかたを東京から発信してはどうかと考えている。組織委員会では「入退場を緻密に管理し、一定時間が過ぎても入場の無い座席、早い時間に観客が会場を離れた座席を利用できる新たな仕組みを構築する」⁸⁷としている。2020年春以降には「公式チケットのリセールサービス」が設置される⁸⁸。世界レベルのアスリートを満席にして迎えるためである。

筆者自身、いまだ手つかずの調査分野であるが、実際、過去の大会において、アスリートの周りにはいる家族や友人は、どの程度、チケットを手に入れていたのだろうか。長く障がい者スポーツを支えてきている人びとはどれだけチケットを手に入れていたのだろうか。プロの野球やサッカーでは「〇〇席」といって、選手の冠がついた座席があり、選手が年間を通して保持している席に子どもたちを招待することはよくある。それを4年の1度のオリンピック・パラリンピックに応用するのである。スポンサーからの無料招待券を含めてチケットを手に入れた個人や選手から自称「〇〇席」といった思想で、近隣に暮らす未来ある子どもたちやアスリート、それらを支える身近な者たちへ手渡しする個の「格好良さ」を日本から発信してもいいのではないか。

2019年6月14日より「特定興行入場券の不正転売の禁止等による興行入場券の適正な流通の確保に関する法律」が施行された。法律上、2020年東京大会のチケットを不正に転売することは禁止されている。ただ、「東京2020チケット購入・利用規約」第2第36条には「転売禁止の例外」がある。「チケット購入者は、チケット購入者の親族または友人、同僚その他の知人に対する場合に限り、同サービスによらずチケットを譲渡することができる」というものである。同サービスとは、前述した「公式チケットリセールサービス」を指す。つまり、組織委員会から「直接購入したチケットの第三者への譲渡は、東京2020公式チケットリセールサービスを利用した購入価格での再販売のみが認められ」ることに加え、チケットを購入できた者は、上記の対象者に限り、譲渡が可能なのである。

ただ、こうした「もてなし」の席を考案するとき頭に入れなければいけないのが、席はもらえても会場までの移動費や宿泊費は自腹になるという点である。協力を乞うボランティアの移動費や宿泊費が個々人に託されているのと同じ構造である。結局、東京から遠い者、つまりは中心から遠い者の負担が大きくなる図式なのである。

筆者は15年ちかく宮城で暮らしてきたが、2011年の東日本大震災後に行われたチャリティーイベントや慈善試合の多くが「会場までは自分で来てください」という条件のものだったと幾人もの友人から聞いた。被災した人は津波で車を流される等、移動できる手段を持ち合わせていない。と同時に、さまざまなイベントに駆り出されたり参加を促されたりすることで、被災者自身の持ち出し（負担金）

も多かったという。とはいえ、人びとの「善意」あってこそのものであることから、申し出を無碍にできない現状があったという。

中には珍しく「交通費を持ちます」という申し出があったため、ありがたく詳細を聞いてみると「フェリーで来てください」といわれたという。「津波で辛く悲しい思いをした子どもたちに海路を利用して移動させることに伴う心痛には想像が及ばなかったのであろうか」と、筆者の友人は話していた。そして主催者に対しては「子供たちは、その海でいやな思いをしたんですよ」とだけ伝え、泊まりがけの親善試合に関する申し出を断ったという。趣旨へ賛同していたチャリティーイベントが、当事者の風景から眺めると、実にゆがんだ形に見えてくることがある。

つまり、式典においてオリンピックとパラリンピックの「すばらしさ」を伝える際、それが誰から見た時の「すばらしさ」であるかに自覚的である必要があるのである。また「格好良さ」を届ける際も、結局のところ、それを一時的にでも受容できる者だけがその「格好良さ」を堪能できてきたことを過去の事例から学んでおく必要があるのである。そうでないと、一方向的な交換（交感）しか生まれられないだけでなく、各々の生活の中までオリンピック・パラリンピックの「すばらしさ」が浸透していかないと考えるからである。加えて、その「すばらしさ」が隠しているものも見えてこない。そう主張してしまうと、オリンピック・パラリンピックの「すばらしさ」が欺瞞に思えてくるであろうか。その「格好良さ」も実現不可能なもの一蹴されてしまうであろうか。肥大化した商業主義のオリンピックとパラリンピックで、見返りを期待しない「格好良い」純粋贈与など夢の世界であろうか。世界不況が続く夢を見る機会が失われている今だからこそ、夢のような現実の「共有」（シェアリング）が、とりわけ、これから生きる子ども達にとって大きな意味を持ち得るのではないだろうか。

おわりに

本稿では学際的視野を意識しながら、2020年の東京大会における式典のありかたやそれ以降の私たちの社会のありようを検討してきた。「健常者」VS「障がい者」といったカテゴリーをもとにした議論を避ける在り方を提示する一方で、お互いの差異をもとに共存の可能性をじかに探る重要性も主張してきた。一見、矛盾しているとも取れる本稿での議論は決して互いを消しあうものではない。文化人類学においては、私たちの生活の中に見られる両義性や混濁性、つまりはこうした一見、相いれないもの（例えば、本稿各章のテーマや問題設定も含む）たちが入り乱れ、相互交渉することで、新たな関係性を生みだしたり、さまざまな矛盾を担保しながらもやりくりしたりする人びとの狡猾な営みがあることを世界各国の事例から報告している。文化人類学は数量的・専門分化的な科学的調査だけではこぼれおちてしまう私たちの現実をまるごと理解することに努めようと、住み込み調査を特徴とし長期的な視座に立った詳細な民族誌的データを用いながら、時に調査者自身の変容を含めて記述する。今後の障がい者スポーツ研究においても重要な手法となろう。

1964年の東京大会は、日本の設備投資主導型の第一次高度経済成長から、輸出が主体となる第二次経済成長への移行期だった。セイコーのクォーツ技術を用いた計時システムが導入されたのもこの時だった⁸⁹。また日本IBMによる競技の記録処理のためのデータ集積・編集システムによって、それまで大会終了後から数ヶ月かかっていた公式記録集の作成が、閉会式終了のわずか3時間後にはブラン

デー・ジョIOC元会長の手元に届いた⁹⁰という。その4年後には国民総生産（GNP）が資本主義国の中で第2位まで躍進し、1964年はまさに日本の経済成長を内外に示す出来事だった⁹¹といえる。また、同じ東京のパラリンピックは、その翌年に、日本身体障害者スポーツ協会が設立されたり、全国身体障害者スポーツ大会が開始されたりするなど、障害者スポーツの裾野が広がるきっかけとなった。さらに用具開発への大きな刺激になったことも伝えられている⁹²。

2020年の東京大会は、この先50年後、100年後に、どのような軌跡を描いているのであろうか。先進国では軒並み人口が減り、社会が縮小し始めている。戦争のない日本にあっては、医療の進歩もあり、障がい者自体の数が確実に減っている。一方で世界を代表する超高齢化社会にあって、お年寄りが障がいを抱える流れも進んでいる。

東京は、二度目の夏季パラリンピックを開催する史上初の都市になる。共生社会という言葉は非常に耳障りがいいし、知った気になれる。しかし、私たちは、いかに自らの周りの人びとを学校や近所等から排除することなく、互いをまるごと受け入れあう日常を過ごしているのであろうか。生産性や効率性という脅し文句の前に、職場から仲間を排除してはいないだろうか。目にみえない障がいや生きづらさに思いを巡らせることがあるのか。

オリンピック・パラリンピックは世界最高峰のスポーツの祭典である。「障がい者スポーツの見方が変わった」、「障がい者なのに、すごい」、「これなら社会で[使えるから]共生できる」等といった「健常者からのまなざし」による言説は確実に増えるだろう。そうした言説を、障がい者自身が自分の強みとして利用して社会進出や自己実現の契機にすることは歓迎すべきことである。しかし一方で、そもそも「健常者」をメインストリームとして創られた社会に潜在する、障がいのある人と健常者のあいだの権力関係には自覚的ではなくてはならない。同じ人間として、もつれやしがらみを含みながらも、正面から個に向き合う——本稿が専門を越えて開かれた議論を呼び、より多くの人と語り、綴りあう材料になることを願ってやまない。

謝辞

本稿は2017年4月1日から2018年3月31日までのあいだ、日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会の研究者として、東京大会の式典のありかた研究に従事した成果の一部をもとにまとめたものである。小倉和夫理事長をはじめ研究会の皆様のご理解とご協力あつての研究であつた。実際の調査にあたっては映像の視聴から式典研究の手順、本論文の執筆に至るまで首都大学東京の舛本直文特任教授にご指導を仰いだ。また日頃からお世話になっている財団法人日本障がい者スポーツ協会の皆様のご協力により入手できた資料も混じっている。まだ執り行われていない東京大会の式典のありかたを検討するにあたり、正直、筆者の前にはデータや情報ばかりで、なかなか「ひと」が立ち現れてこないことが最後まで筆を進める上での障壁となった。執筆にあたっては親しい友人たちと語ったり、当事者によって書かれた文献を分野問わず読みつないだりしたことで、なんとか人類学的基盤から拙稿を書き上げることができた。改稿にあたっては査読を引き受けてくださった二名の査読者の丁寧かつ的確なご指導が支えとなった。「社会人」を経験してどこか「生きづらい」と感じていた筆者を快く迎え入れ、思考を鍛えてくださっている文化・社会人類学を専門とする皆様にも心より感謝の意を申し添えたい。

注

- 1 西田朋美 2015 「視覚障がい者の視覚的生理機能とADL上の問題点」『Monthly Book Medical Rehabilitation』187 : 42.
- 2 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 2017 「東京2020大会開会式・閉会式に関する基本コンセプト最終報告」 <https://tokyo2020.org/jp/games/ceremony/concept/data/171220concept-report-jp.pdf> (2019年12月2日最終閲覧).
- 3 例えば Amparo Porta, Jose María Peñalver Vilar and Remigi Morant Navasquillo, 2013, "Music of the Inaugural Ceremony of London 2012 : A Performance among Bells," *IRASM*, 44 (2) : 253-276 ; Chwen Chwen Chen, Cinzia Colapinto and Qing Luo, 2012, "The 2008 Beijing Olympics opening ceremony : visual insights into China's soft power," *Visual Studies*, 27 (2) : 188-195などを参照のこと.
- 4 小笠原博毅・山本敦久編 2016 『反東京オリンピック宣言』 航思社 ; 江沢正雄 2004 「やっぱりオリンピックなんかいらない！」『現代スポーツ評論10』 中村敏雄編, 創文企画, pp.63-68などを参照のこと.
- 5 ホーキング青山 2017 『考える障害者』 新潮社, p.76.
- 6 舛本直文 1989 「スペクタクル理論とソウル・オリンピックの解釈学」『東京都立大学体育学研究』14 : 27-38.
- 7 阿部潔 2001 「スポーツ・イベントと『ナショナルなもの』 : 長野オリンピック開会式における『日本らしさ』の表象」『関西学院大学社会学部紀要』90 : 85-97.
- 8 高橋雄一郎 2005 「長野オリンピック開会式と国民国家」『身体化される知—パフォーマンス研究』 せりか書房, pp.125-162.
- 9 森野聡子 2012 「ロンドン・オリンピック開会式に見る『プリティッシュネス』 : マルティカルチュラリズムから『多様な労働者の結束』へ」『静岡大学情報学研究』18 : 1-18.
- 10 渡会環ら 2017 「リオデジャネイロオリンピック開会式にみる〈ブラジル〉の表象」『共生の文化研究』11 : 6-12.
- 11 飯笹佐代子 2016 「開会式における多文化共生へのメッセージ」『Peace and culture』8 (1) : 49-56.
- 12 Montserrat Pareja-Eastaway, 2010, "Construyendo la Barcelona creativa : nuevos actores, nuevas estrategias," *Finisterra*, 45 (90) : 133-152 ; Francisco- Javier Monclús, 2003, "The Barcelona model : an original formula ? From 'reconstruction' to strategic urban projects," *Planning Perspectives*, 18 : 399-421 ; Francesc Muñoz, 2006, "Olympic urbanism and olympic Villages : planning strategies in Olympic host cities, London 1908 to London 2012," *Sociological Review*, 54 (s2) : 175-187.
- 13 Maria Eduarda da Mota Rocha, 2017, "Nacionalismo e Diversidade : do Programa 'Esquenta' da Rede Globo, à cerimônia de abertura das Olimpíadas do Rio 2016," *Política & Sociedade — Florianópolis* —, 16 (35) : 159-177.
- 14 Catherine Baker, 2015, "Beyond the island story ? : The opening ceremony of the London 2012 Olympic Games as public history," *Rethinking History*, 19 (3) : 409-428 ; Christopher G.A. Bryant, 2015, "National art and Britain made real : the London 2012 Olympics opening ceremony," *National Identities*, 17 (3) : 333-346 ; Cathy Williams, 2012, "On The Record : Towards a Documentation Strategy," *Journal of the Society of Archivists*, 33 (1) : 23-40.
- 15 Keren Zaiontz, 2013, "On the Streets/Within the Stadium : Art For and Against the ' System' in Oppositional Responses to London," *Contemporary Theatre Review*, 23 (4) : 502-518.
- 16 Chris Arning, 2013, "Research Article — Soft power, ideology and symbolic manipulation in Summer Olympic Games opening ceremonies : a semiotic analysis," *Social Semiotics*, 23 (4) : 523-544.
- 17 Synthia S. Slowikowski, 1991, "Burning Desire : Nostalgia, Ritual, and the Sport-Festival Flame Ceremony," *Sociology of Sport Journal*, 8 : 239-257.
- 18 戸田美佳子 2015 『越境する障害者 : アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』 明石書店, pp.12-21.
- 19 2018年1月20日のフィールドノート (岐阜県) より.

- 20 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 2018『障がい者スポーツの歴史と現状』公益財団法人日本障がい者スポーツ協会, p.45.
- 21 小倉和夫 2016「パラリンピックの原点を探って—主に戦争とパラリンピックとの関連について—」『パラリンピック研究会紀要』6:1-10.
- 22 石坂友司 2018『現代オリンピックの発展と危機1940-2020:二度目の東京を目指すもの』人文書院, pp.26-103.
- 23 スペイン・カタルーニャ州出身で1980年から2001年までIOC会長を務める.
- 24 マイケル・ペイン 2008『オリンピックはなぜ、世界最大のイベントに成長したのか』保科京子・本間恵子訳, グランドライン, pp.29-34.
- 25 ペイン, 前掲書, pp.40-46.
- 26 1982年, 国際ストーク・マンデビル競技連盟 (ISMGF), 国際身体障がい者スポーツ機構 (ISOD), 国際視覚障がい者スポーツ協会 (IBSA), 国際脳性麻痺者スポーツ・レクリエーション協会 (CPISRA) の4団体により設立された.
- 27 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 2018『障がい者スポーツの歴史と現状』公益財団法人日本障がい者スポーツ協会, p.37.
- 28 この大会は, IOCがオリンピックとパラリンピックを連動させた初めての大会であり, オリンピックで使用した会場も使用された. ただし, 主催はICCである.
- 29 IPCが実質的に主催した初めての大会は, 1994年のリレハンメル冬季パラリンピックである.
- 30 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会「ジャパンパラとは」, <https://www.jsad.or.jp/japanpara/what.html> (2019年12月1日最終閲覧).
- 31 ペイン, 前掲書, pp.177-178.
- 32 IOCは1992年のバルセロナ大会時の国連による対ユーゴスラビア制裁解除に対して初めてオリンピック休戦提案をした.
- 33 藤田紀昭 2016『パラリンピックの楽しみ方:ルールから知られざる歴史まで』小学館, pp.152-152.
- 34 2012年のロンドンパラリンピックから, 障がい認定の厳格化等の条件を満たしたIPCから承認を受けた陸上, 水泳, 卓球だけが再び実施されることになった. 他方, 2014のソチ, 2018年の平昌における冬季大会には知的障がい者は参加していない.
- 35 IPC “Media Centre,” <https://www.paralympic.org/feature/2-historic-one-bid-one-city-agreement> (May 23, 2018).
- 36 公式発表に該当情報の明記なし (一印).
- 37 国際交流基金「プレゼンターインタビュー:障がい者の舞台芸術界をリード. ジェニー・シーレイのチャレンジ」, http://performingarts.jp/J/pre_interview/1701/1.html (2018年5月25日最終閲覧).
- 38 朝日新聞「英傑 歴史刻め」2012年7月28日.
- 39 毎日新聞「ロンドン五輪:開会式視聴40億人」2012年7月28日.
- 40 毎日新聞「ロンドン五輪:開幕 日本, 五輪1世紀 英国らしさ満載 (その1)」2012年7月28日.
- 41 朝日新聞「南米初開催 熱気包む」2016年9月8日.
- 42 遠藤華英 2017「リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察」『パラリンピック研究会紀要』7:33-35.
- 43 朝日新聞「南米初の五輪 緑に染まる『今日より明日良くなる』」2016年8月7日.
- 44 朝日新聞「物語の主役 国から人に」2012年7月28日.
- 45 毎日新聞「RIO・リオ五輪:閉会式でも空席 最後まで南米流」2016年8月23日.
- 46 公益財団法人日本オリンピック委員会『オリンピック憲章 (2017年9月15日から有効)』86, <https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2017.pdf>, (2018年5月17日最終閲覧).
- 47 ここではオリンピックにおける開・閉会式の主要な要素をおさえるにとどめる.

- 48 IOC, Factsheet Opening ceremony of the Games of the Olympiad (January 2018), <https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Factsheets-Reference-Documents/Games/Ceremonies/Factsheet-Opening-Ceremony-of-the-Games-of-the-Olympiad.pdf> (May 2, 2018), pp. 1-4.
- 49 IOC, Factsheet The Closing ceremony of The Olympic Games (December 2017), https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Factsheets-Reference-Documents/Games/Ceremonies/Factsheet-The-Closing-Ceremony-of-the-Olympic-Games.pdf#_ga=2.168784289.1050337863.1527128268-1095184699.1525066674 (May 24, 2018), pp. 1-2.; 森野, 前掲論文, p. 4.
- 50 産経新聞「五輪栄誉賞のケイノ氏『教育通して未来の人類を育てる』」2016年8月6日, <http://www.sankei.com/rio2016/news/160806/rio1608060034-n1.html> (2018年5月22日最終閲覧).
- 51 同賞は, スポーツを通じて社会に貢献した個人や団体を称えるために設けられたものである。ケイノ氏は1968年メキシコオリンピック陸上男子1500メートルで, ケニア初の金メダルを獲得後, 孤児支援や青少年教育に尽力してきたことが評価されての受賞となった。
- 52 読売新聞「リオ踊り出す」2016年8月6日。
- 53 森野, 前掲論文, pp. 3-4.
- 54 谷口源太郎 2019『オリンピックの終わりの始まり』コモンズ, pp.175-176.
- 55 1936~1988年まで鳩の放鳥は聖火が到着する前に行われていたものであった。1988年のソウル大会において聖火台の淵にいた数羽の鳩が聖火に巻き込まれてしまったことから, 1992年のバルセロナ大会からは動物愛護の観点から本物の鳩の使用は中止されている (IOC, Factsheet Opening ceremony of the games of the Olympiad (January 2018), https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Factsheets-Reference-Documents/Games/Ceremonies/Factsheet-Opening-Ceremony-of-the-Olympic-Winter-Games.pdf#_ga=2.74929426.1050337863.1527128268-1095184699.1525066674, (May 24, 2018), 2.; 森野, 前掲論文, p. 4)。
- 56 1972年には審判による宣誓, 2010年のユース・オリンピックからはコーチによる宣誓が加わった。しかし, 2018年の平昌から時間短縮のために, これらの3つが1つに統合された。
- 57 森野, 前掲論文, p. 4.
- 58 山本夏生 2017「テレビメディアが生み出すエリート像の検討~2016年リオオリンピック期間中の夜の報道番組NHK『ニュースウオッチ9』の内容分析から~」日本スポーツ社会学会発表資料より。
- 59 公益財団法人全国高等学校体育連盟「2020インターハイ特別基金」https://www.zen-koutairen.com/f_kikin2020.html (2019年10月8日最終閲覧)。
- 60 高校野球ステーション「第102回全国高校野球選手権大会」<https://www.baseball-station.com/koshien/2020/> (2019年10月9日最終閲覧)。
- 61 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 2017, 前掲資料 (2019年12月2日最終閲覧)。
- 62 リオ大会におけるジャパンハウスや東京大会のプロモーション等においてはすでに「水の都・東京」が発信されている。
- 63 アンドルー・フィーンバーク 1995『技術——クリティカル・セオリー』藤本正文訳, 法政大学出版局, p. 1.
- 64 同上, p. 2.
- 65 公益財団法人日本オリンピック委員会 2019「オリンピック憲章2019年版・英和対訳」<https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2019.pdf> (2019年12月2日最終閲覧)。
- 66 エリック・ホブズボウム, テレンス・レンジャー 1992『創られた伝統』前川啓二ら訳, 紀伊国屋書店。
- 67 青木保 1992「『伝統』と『文化』」『創られた伝統』前川啓二ら訳, 紀伊国屋書店, p.471-482.
- 68 例えば, 田村克己編 1999『20世紀における諸民族文化の伝統と変容 4 文化の生産』ドメス出版や鏡味治也 2010『キーコンセプト 文化—近代を読み解く』世界思想社, 障害の文化的次元への理解のためには, ベネディクト・イングスタッド, スーザン・レイノルズ・ホワイト編著 2006『障害と文化—非欧米世界からの障害観の問いなおし』明石書店などを参照のこと。

- 69 白井宏昌 2016「集中か分散か? : リンピック開催による都市空間再編に関する論考」『現代スポーツ評論』35 : 105.
- 70 ベイン, 前掲書, p.259.
- 71 Moragas Spà, Miquel de, MacAloon, John and Llinés, Montserrat (eds.) 1995 Olympic Ceremonies : Historical continuity and cultural exchange, Punt groc & Associats, 347.
- 72 藤浪康史 2016「座談会：オリンピックにおける文化と芸術を考える」『現代オリンピック評論』35 : 19.
- 73 David Ramiro, 2017, "Paralímpicos. Los Juegos del cambio", Barcelona 92 : 25años del gran cambio en el deporte español, Cofás, S.A., p. 256.
- 74 ジュールズ・ボイコフ 2018『オリンピック秘史—120年の覇権と利権』中島由華訳, 早川書房.
- 75 荒井裕樹 2011『障害と文学：「しののめ」から「青い芝の会」へ』現代書館, pp. 12-14.
- 76 同上, pp. 14-15.
- 77 朝日新聞「感動の先に：東京」2016年8月23日.
- 78 毎日新聞「RIO2016：多様性 リオ五輪開幕」2016年8月6日.
- 79 CNN「五輪女子ラグビー、選手に恋人女性がプロポーズ：祝福受ける」2016年8月10日, <https://www.cnn.co.jp/showbiz/35087302.html> (2018年5月29日最終閲覧) ; Huffpost「リオ五輪で50人以上がカミングアウトしたのはなぜ? LGBTの権利向上を目指すスポーツ界」https://www.huffingtonpost.jp/2016/11/20/olympic-and-lgbt-athletes-1_n_13117396.html (2018年5月29日最終閲覧).
- 80 小田亮 2018「コモンとしての景観／単独性としての風景：景観人類学のために」『人文学報（社会人類学分野11）』514（2）：9-10 ; 三浦展 2006『脱ファスト風土化宣言』洋泉社.
- 81 ホーキング青山, 前掲書, pp. 48-54.
- 82 浅生鴨 2018『伴走者』講談社, p. 202.
- 83 「豊かとされる」と表記したのは, 斎藤幸平ら [2019『資本主義の終わりか, 人間の終焉か? 未来への大分岐』集英社] が指摘するように, 筆者の認識においても国内の政治経済の状況は悪化するばかりで, とりわけ, 生の豊かさという観点からすると, 現状の日本には課題が多いと思われるからである. 「1年以内に自殺未遂を経験したと推計された人数は全国では53万5,000人」という国 [日本財団 2017「日本財団自殺意識調査2016（結果概要）」<https://www.nippon-foundation.or.jp/media/archives/2018/news/pr/2016/img/102/2.pdf> (2019年12月2日最終閲覧)] である.
- 84 松森果林 2015「女性の聴覚障がい者が感じる日常生活のバリアと課題」『Monthly Book Medical Rehabilitation』187 : 64.
- 85 同上 : 65-67.
- 86 鷺田清一, 山極寿一 2017『都市と野生の思考』集英社インターナショナル, pp. 36-37.
- 87 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会「マーケティング」<https://tokyo2020.org/jp/games/plan/data/candidate-section-7-JP.pdf> (2019年10月10日最終閲覧).
- 88 同上「チケットのルール」<https://tokyo2020.org/jp/games/ticket/rule/> (2019年10月10日最終閲覧).
- 89 ベイン, 前掲書, p. 300.
- 90 編集部 2014「得意分野で大会を盛り上げる」『東京人—特集「オリンピックと都市東京」』345 : 82-83.
- 91 毎日新聞「閉塞感の突破口に」2012年7月28日.
- 92 藤田, 前掲書.